

Subsistence and Sharing Among the Kalahari Hunter Gatherers (Feature Articles : Contemporary Perspectives on African Moral Economy)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005868

特集：アフリカ・モラル・エコノミーの現代的視角

カラハリ狩猟採集民における生業と分配

ー危機に対する戦略としてのモラル・エコノミー



国立民族学博物館 池谷和信

アフリカ南部のカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民サンの社会は、平等主義社会の典型であるといわれる。本稿では、危機に対する戦略としてのモラル・エコノミーという枠組みから、市場とのつながりをもちつつも、生存維持的志向を持つサンの経済行動の特質を把握する。具体的には、サンの分配の地域性を把握すると同時に、ボツワナ中部のガナに焦点を当てることで、彼らのなかでの分配の実践や貯蔵方法を生業別に報告する。その結果、獲物や収穫物の所有者は、生業ごとにあらかじめ緩やかなルールによって決められていること、狩猟採集のみならず農耕牧畜においても「持つ者」から「持たざる者」への分配システムが働いていること、とりわけ農耕では収穫時期の畑の近くにキャンプが移動してきたあとに収穫物が分配されていたことが明らかになった。また、彼らは、自給用に加えて、交易用の肉を獲得するための商業狩猟をおこない、肉の平等分配という原理を維持しながら、食糧用と交易用の肉とに区別していた。さらに、本稿の事例とアフリカ（焼畑）農民の生業とを比較するなかで、ヤギ飼養の重要性が両者のあいだで共通していた。

はじめに

アフリカの農民経済を対象にして、経済学や経済人類学から様々なアプローチがなされてきた。そのひとつが、モラル・エコノミー論の枠組みからアフリカ農民の経済を考えるものである（杉村，2004）。そこでは、アフリカの農民経済はハイデンのいう「情の経済」としての視点から把握される必要があり、中心軸として農民の互酬的関係を無視することができないと言及されている。同時に、その互酬的関係は、サーリンズのいうような一般互酬性（generalized reciprocity）¹⁾と密接に関係しており、そのモデルケースとしての狩猟採集民の研究は農民の経済を考察するうえでも重要な貢献をする可能性があるものとして位置づけられている。

本稿は、互酬的関係をめぐってアフリカの狩猟採集民社会と農耕民社会とのあいだに連続性があるものなのか、非連続性を持つものであるのかという問題意識のもとで、狩猟採集民の事例を報告するものである。本研究では、平等主義社会の代名詞のようにいわれ、南部アフリ

カに広く暮らしてきたサン（ブッシュマン）社会を対象にして、サンのなかでの食物分配²⁾の多様性を把握すると同時に、ボツワナ中部のガナに焦点を当て、野生スイカや動物の肉の分配のあり方や貯蔵方法、交易の状況を報告する。それを踏まえて、狩猟採集民のモラル・エコノミーの存在様式とその変容を、農耕民のそれと比較考察することを本研究の目的とする。

筆者は、1987年以来現在まで、断続的ではあるが、ボツワナ中部のサンを対象にした人類学的な調査研究を継続してきた（池谷，1989，2002，2006，2007など）。主な研究テーマは、狩猟、農耕、牧畜などのサンの生業活動の実態とその変容を生態人類学および歴史人類学的に把握することである。その際に、おのおのの生業活動に関わる食物分配については断片的な資料を提示してきた（池谷，1989，1996）。

ここで、本研究を進める上では不可欠になる、生業と経済に関する2つの研究枠組みについてふれておこう。まず、これまでの狩猟採集民の生業に関する研究では狩猟と採集のみに焦点がおかれがちであり、農耕と牧畜などの生業は新たに導入されたものとして軽視されてきた。しかし、実際にはそれらの生業を複合しているサンが存在することから、生業複合の視点を無視することはできない³⁾。次に、狩猟採集民の経済は伝統的に自給経

済であると規定されがちであったが、実際のサンは古くから鍋や斧などの鉄製品やタバコのような嗜好品を外部社会から入手してきた。つまり、現在の狩猟採集民の経済は自給経済から商品経済への移行期のなかに位置づけられるものとは限らないわけで、商品化という要素を無視することはできない。以上のように、本研究の特徴は、生業のなかに農耕牧畜を含めていること、商品経済の影響を受けている狩猟を対象にしている点にある。なお、これら2つの枠組みは、農耕のみに従事するわけではない多生業複合を営み(杉村, 2004: 74)、商品経済化によって変わりつつある農耕民社会と比較する際に、同様の資料を提示することになるであろう。

調査対象とされるサンは、カラハリ砂漠の過酷な環境に適応した狩猟採集民としてよく知られている。1960年代の生態人類学の研究によると、サンの生業を中心とした生態モデルは人類の原初的な姿を示すものとして広く注目された(Lee, 1979)。1980年代には、彼らの生業は外部の政治経済状況によって大きく影響を受けているとして、先史時代の人類にまでつなげようとする考え方は批判された。これが、いわゆる「カラハリ論争」として知られる(池谷, 2002)。近年では、サンの先祖といわれる人びとを対象にした考古学的研究による新たな発見も生まれており、砂漠から高地、海岸などの多様な自然環境に暮らすサンの生業複合の様態などにも、予想以上に地域的な多様性が認められることが明らかになっている。従来の生態人類学の研究では、サンの生業のなかでは採集が中心であり狩猟は副次的であるといわれていた。しかし、最近の考古学的研究によると、レソトの山岳地域では、生業の中で河川漁労の重要性も指摘されている(Mitchell, 2002)。

1. 南部アフリカのサン社会における分配の地域性

上述したように、本稿では、生業複合のあり方や商品経済の浸透度との関係のなかで、分配の様式を把握する。ここでは、集団の地域性への配慮なしには現象の一般化は困難であるという、近年のアフリカ狩猟採集民研究の知見に基づき(Kent, 2002)、2つの関係を考慮して分配の地域性について論じる。

まず、図1に、南部アフリカにおけるサンの言語集団の分布を示す。現在のサンは、ボツワナとナミビアから北はアンゴラ、南は南アフリカにまで広がるカラハリ砂漠を中心にして暮らしているが、国境によって分断された集団もみられる。具体的には、北部にはクン(!Kung)、

ジュンホア(Ju' ho), ハイヌー(Hai//om)、中部にはガナ(/Gana)、グウィ(/Gui)、ナロ(Nharo)、南部にはコー(!Ko)、コマニ(Komani)などの言語集団が知られている。これまでのサン社会を対象にした研究の蓄積には大小があるものの、ここでは利用可能な資料を用いて食物分配の地域性について述べる。

1.1. 遊動や半定住のサン社会

かつてのサンは、すべて遊動する狩猟採集民であった。彼らは、商品経済の影響をほとんど受けずに、狩猟採集のみに従事する人びとであるといわれた。なかでも狩猟によって獲得された肉は狩猟での役割や親族関係に応じて分配された。この分配が、経済的平等に対する社会的圧力として稀少資源を確保するための保証としておこなわれているのか否か、各地域におけるサンの分配に関する事例を報告する。

ナミビア北東部に暮らすクン(!Kung)は、分配の社会的価値を十分に意識しているという。彼らの慣習では、獲得した獲物は、最初に放った弓矢の矢の所有者のものになることになっている(Marshall, 1961)。ハンターは、自らが作った矢、贈り物として与えられた矢、借りた矢のうちのひとつの矢を選んでから猟を行い、獲物がとれた場合には主としてキャンプ内に肉を分配して自家消費する。

その一方で、ボツワナ北西部のクンでは、バンド間において1対1の個人的な関係による贈り物の交換がみられる。これは、研究者によってハロー・システム(hxaro system)として呼ばれ、必ずしも食物に限定した交換ではないが、平均すると成人一人につき16人のハロー・パートナーがいる(Wiessener, 1982)。このハローは、遅延的な互酬性(reciprocity)としての特徴を持つ交換システムであるとみなされる。

さらに、ボツワナ中央部のカデにおいては、1960年ごろのグウィは、捕獲された獲物の肉の分配において平等性を保持していたことが報告されている(Silberbauer, 1981)。しかし、ほぼ同じ地域のガナにおいては、2つの異なる実像が提示された。まず、1960年代おわりのカデのガナでは、獲得したサンの肉は、キャンプの成員に分配されたことが知られている(田中, 1971)。その一方で、1976、1977年におけるカデから120キロメートル離れたモラボのガナは、すでに半定住生活を送っていて、世帯間で家畜所有頭数の違いが認められ、カデのガナとは異なる様相を示していた。そこでは、人びとが分配する実践のなかでは、平等主義が欠如している点が指摘されている(Cashdan, 1980)。

以上のように、クンとグウィとガナという限られた集

団の事例ではあるが、遊動する社会と半定住社会では、集団内の肉の分配には共通性がみられると同時に、集団間における分配に関する地域的な差異が存在することを見出すことができる。

1.2. 定住化したサン社会

1980年代以降において、南部アフリカの各地に暮らすサンは、各国政府の政策のもとに定住生活を余儀なくされている。それにともない、民芸品の販売や狩猟で獲得した肉の販売などの商品経済が浸透していく（池谷, 2002）。なかでもボツワナ中央部に位置するクーチェやカデ、そしてニューカデなどの定住地を対象にして、定住地における分配に関わる事例研究が蓄積されてきた。

まず、ボツワナ中央部のクーチェ集落に定住したサン（グウィ、ガナ、クア、農牧民カラハリ族の混住）のなかでは、前節で述べたようなハロー・システムがみられないという（Kent, 1993）。1987年から1991年にかけてのクーチェでは、肉の分配などにみられる関係は、経済的な意義よりはむしろ社会的ネットワークを形成するうえで重要な働きがあることが指摘された。しかしながら、前節のクンの場合は遊動するサンが対象であるのに対して、クーチェは遊動するサンが集住した集落であり、2つの地域の状況が大きく異なっていることに注意をしたい。クーチェに移住する以前に、この地域でハローが存在したのか否かが問われるであろう。

その一方で、同じくボツワナ中央部の定住地カデ集落での事例研究が蓄積されている。ここもまた同様に、周辺に居住していたグウィやガナやカラハリ族が移住してきて形成された集落である。ここでは、定住化以降の約15年を対象にして、狩猟や採集などの生業別に獲物の分配方法などが詳細に報告されてきた。まず、狩猟による獲得物の分配方法については、狩猟法の違いに応じて整理することができる。1982年の騎馬猟では、馬の所有者が多くの肉を取り⁴⁾、それ以外の人は猟への貢献度に応じて分配をうける（Osaki, 1984）。これは、肉に関して平等主義にもとづいた分配は行われなくなり、「持つ者」と「持たざる物」との格差が生ずるようになったことを示す（大崎, 1991:582）。また、肉の大部分は自家消費され、一部は交易にも出されているという。

次に多数の犬を使って獲物を追いつめて槍で仕留める犬猟では、1987年の事例をみると、肉は猟の参加者の間で平等に分配され、騎馬猟のように特定の人間に肉が集中するようなことは起こらない（池谷, 1989）。その後、1993年の犬猟や兎猟においては、毛皮が商品として重要であったため、商業的狩猟が活発におこなわれているが、平等な分配も維持されていた（池谷, 2002）。なお、

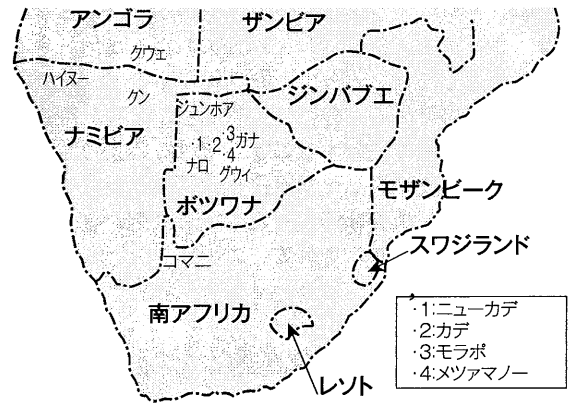


図1. 南部アフリカにおけるサンの言語集団の分布とボツワナ中央部の調査地

兎猟では、獲物の肉の量が少ないということもあって、家族内か集落の一部の区画内に住む人びとにしか分配されない。

さらに、採集物についても、かつては平等に分配されたものであるが、1990年の現地調査によれば、定住化にともなう近代化の影響に応じて分配の方法は大きく変化しているという（今村, 1993: 22）。今村は、協同と分配をひとつのシステムのなかで相互に関連づけることの重要性を指摘し、完結した経済システムとしての分配の機能の変容しており、当時のサンにおいては分配の儀礼的側面が強調されてきたと指摘している（今村, 1993: 23）。

農耕による収穫物の分配に関していえば、1993年のカデやモラボやキカオなどの事例ではあるが（図1参照）、栽培スイカが豊作になると、収穫された栽培スイカが親族間や友人間において分配されている（池谷, 2002）。その分配の仕方としては、居住地である畑のキャンプを移動させて分配に預かる場合と、中心集落からその畑に通って分配をうける場合とに分けられるが、居住形態が変わっても分配の方法は変わっていない。

さらに、1997年にカデの住民が、中央カラハリ動物保護区の外に再移住したニューカデ（コエンシャケネ）集落においても、中心集落のプロットに暮らす人びととそこから離れて「マイパー」⁵⁾に暮らす人びととのあいだに、採集物や紅茶や砂糖などの分配・交換がみられることが指摘されている（丸山, 2004: 263）。ただ、これらの分配が、上述したようなカデのキャンプ内や定住地でみられた分配と、どのような相違点があるのか否かについては明らかにされていない。

以上のことから、定住化した集落でのサンによる食物分配は、クーチュ、カデ、ニューカデのような地域を超えて広く共通して行なわれてきた活動であるといえ、ボツワナ中央部のガナの場合には、狩猟法ごとに分配のあり方をかなり詳細に把握することができる。また、分配のあり方が、毛皮の商品化や定住化政策のなかで変化してきていること、市場経済が浸透しても分配がなくなったわけではないことが示される。

2. ボツワナ中部の狩猟採集と分配

次にボツワナ中部に暮らすガナに焦点を当て、動物の肉や野生スイカの分配のあり方や貯蔵方法、交易の状況を報告する。調査地は、ボツワナの中央カラハリ動物保護区 (Central Kalahari Game Reserve) 内に位置する、カデやモラボやメツァマノーなどの集落である⁶⁾。調査地の自然特性としては、1年はおよそ12-3月の雨季と4-11月の乾季とに分けられ、年間の平均降水量は約400-500 mmを示すが、降水量の年変動が大きいのが特徴である。植生は、その大部分が灌木や草地からなり、一部に林がみられる程度である。

2.1. 動物肉の分配と貯蔵、そして交易

サンの狩猟では、弓矢猟、犬猟、騎馬猟、罾猟などの多様な形態がみられた (池谷, 1989)。

このなかで弓矢猟は、対象地域において消えつつある狩猟法である。その従事者数は、現在、10人前後しかおらず、その肉の分配に関する詳細な資料を入手することができない。筆者の聞き取りによると、各ハンターが自分の矢を持参していて、猟の際に矢尻の交換は認められないが、キャンプ内で獲物は平等に分配されているという。また、2000年前後のメツァマノーにおいては、ほとんど年配のサンは弓矢猟に従事していたが、若い世代において弓矢猟と騎馬猟とを併存する人がいた点には注意してよいであろう。

次に、犬猟は、弓矢猟と同じように古くから行われてきた猟である。これには、猟の助けをする犬と仕留めるための槍が必要である。このため、犬の所有者が狩猟の際に捕獲した獲物の所有者になることが緩やかなルールになっている。騎馬猟に関しては、カデにおいて異なる年代ではあるが、その分配の事例が報告されている (Osaki, 1984; 池谷, 1989; 今村, 1996)。なかでも1987年と1989年のそれぞれガナとグウィによる騎馬猟において、前者は生肉で後者は干肉という違いはあるにせよ、獲得した肉の部位や肉の獲得者がそれぞれ報告されてい

る。2つの事例を比較してみると、馬の所有者に大部分の肉がもたらされている点では共通しており、その肉が販売されているか否かでは異なっている。つまり、両者とも猟の参加者に肉がもたらされ、第二次分配によって肉はさらに分配されていく。前者では、肉の一部は猟の参加者や猟に使用したポリタンクを借りた人に分配される。後者の事例では、馬の所有者は獲得した多くの肉を販売しているわけではなく、自家消費や親族への分配に使われている (今村, 1996:56)。この点では、肉の所有に関する個人間の格差は解消されている点に注意してよいであろう。

罾猟は、古くから行われてきた猟である。ダイカーやスティーンボックのような小型動物をねらう。1991年は、カデの周辺では野生スイカが大豊作であったことが大きな原因となって、数ヶ月間にわたる長期間の罾猟が行われた (池谷, 1996)。その結果、罾猟を中心として犬猟も組み合わせ、ある世帯では104枚の毛皮を獲得しているのである。その毛皮は、ロバの購入、現金取得、民芸品の材料、贈与などに使われている。また肉も現金を獲得できるものではあるが、一部の人がすべての肉を独占することなく、何らかの販売用の肉を残しながら食用や贈与用に使われている。

以上のことから、狩猟の方法は様々であるが、道具の所有者が肉の所有者になることが多いことがわかる。弓矢猟では矢、犬猟では犬、騎馬猟では馬、罾猟では罾の所有者ということになる。これが、サン社会のなかでの緩やかなルールである。

その一方で、犬猟や騎馬猟によってゲムスボックのような大型動物が捕獲された場合には、干肉に加工してから近隣の町へ交易に出かけるのが普通である (池谷, 1996)。ある狩猟キャンプのようすを紹介しよう。ゲムスボックの肉は集団猟の場合には猟の参加者に分配され、キャンプでは近隣の世帯にも分配されるが、交易用の肉が残される。つまり、ある個人が自分の分け前を全部食べずに一部を残しておき、干し肉にして交易に使うこともあれば、猟犬の所有者のものとなった肉を分配してわちあい、所有者が残った肉を交易に使うこともある。いずれにしても動物の肉は、細長く切られて天火乾燥させる。その後、この干肉を販売して、斧や鍋などの鉄製品やタバコのような嗜好品、ときにはヤギのような家畜を入手することができる。もちろん、これらは個人の所有物になる。

このように、彼らは、自給用の肉と交易用の肉の獲得という2つの目的のためにも狩猟をおこなうのであるけれども、キャンプでの肉の平等分配という原理を維持しながら、食糧用と交易用の肉とを分けているのである。

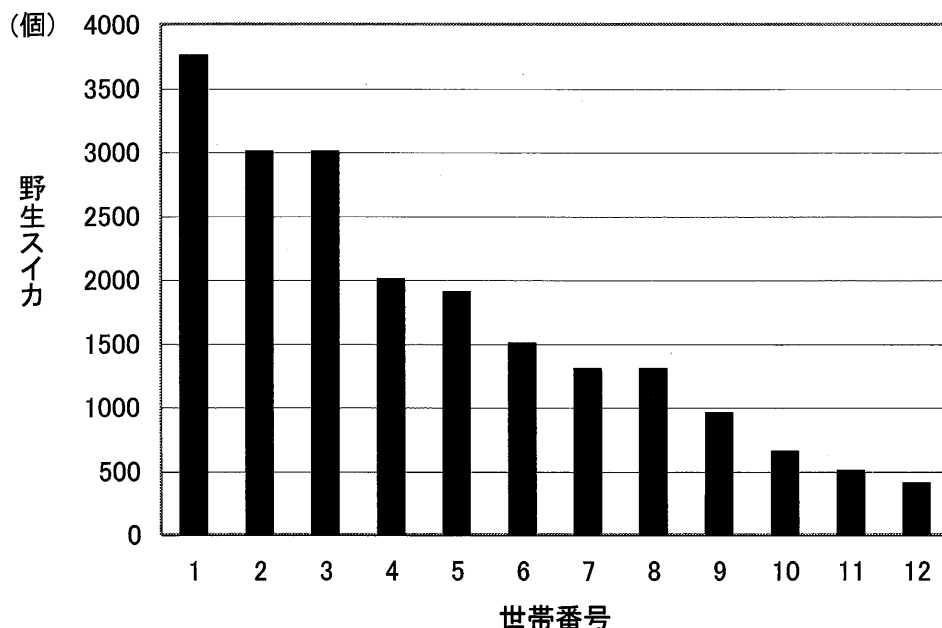


図2. 貯蔵される野生スイカの世帯別数量
出所：1991年8月のモラボにおける筆者調査。

2.2. 採集物の分配と貯蔵

採集は、カラハリ狩猟採集民にとって最も重要な生計基盤であるといわれる。しかし、カラハリ砂漠の南北で植生は大きく異なり、主な植物資源は異なってくる。例えば、ボツワナ北西部に暮らすクンでは、モンゴンゴといわれる木の实が重要な食料であるといわれる (Lee, 1979)。その一方で、筆者の主な調査地であるボツワナ中央部では、より乾燥した気候のために、その木の实は自生してはいない。

モラボにおけるサンのキャンプの一例を紹介する。彼らは、数世帯が集まってひとつのキャンプを構成している。各世帯はそれぞれ草でおおわれたドーム型の家屋を持ち、家のなかには火おこし場をもっている。そして、乾季のキャンプの場合には、キャンプの内や外にスイカ専用の貯蔵庫がつくられる。これは小屋のときもあるし、木をおおっただけのものもある。小屋建設の理由は、野生動物による被害を防ぐことである。キャンプにヤギを所有する人がいれば、キャンプの中央にアカシアの木で囲まれたヤギ囲いがみられる。さらに、自然資源の枯渇や不幸な事件がおきた場合など何らかの理由でキャンプは放棄され、人びとは別の場所に移動する。移動先のキャンプではその成員が変わることが多く、これは離合集散といわれる。

野生スイカは、一般的に雨季に実をつけて、乾季に入った6月になると寒さのために実が枯れてしまうが、果肉が厚いこともありすぐに腐ることはない (池谷, 2002)。毎年、降雨の状況に左右されるので、カラハリ砂漠のどこにスイカが自生するのかは誰も予測できないが、サンはそれらをひろい集める。野生スイカは誰でもが獲得できるという暗黙の了解があるが、最初の採集者の所有物とされる。彼らは掘棒を使って、その果肉を砕いて口に入れる。筆者の研究によると、ナトリウムやカリウムが日本のスイカより多く含まれていることがわかり、日本のスイカのような果物ではなくて食糧としての意味も無視できない (Ikeya, 1996)。

筆者が、各世帯別に貯蔵された野生スイカの数量を数えると、その世帯ごとの総数は、400から4000個と大きなばらつきがあることが認められる (図2)。これらの差の背景には、対象キャンプに到着した日時が左右していると思われる。所有しているスイカが欠乏してくると、ほかの場所に移動する世帯もあれば、世帯間での野生スイカの分配を利用して、キャンプに居続ける世帯もある。「持てる者」は、「持たざる者」からの要求を拒むことはできないのが道義なのである。スイカの所有量には世帯間の差がみられるのであるが、平均化の作用が働いている。キャンプの移動の際にスイカが残っている場

合には、サンがキャンプの家屋に近接する地中にスイカを埋めて保存し、つぎに採集者がこの地域に来たときに利用する。

以上のように、サンの採集する多数の物のなかで野生スイカの事例に焦点をおいたものではあるが、採集とともに長くは数ヵ月にわたる貯蔵がともなうこと、貯蔵量には世帯間の違いが明瞭に存在するが、野生スイカの分配によって平等に消費されている点が明らかになった。

3. ボツワナ中部の農耕牧畜と分配

3.1. 農作物をめぐる分配と社会関係

サンは、伝統的には家畜飼育や農耕を行わないといわれてきた。しかし、各地の事例をみていくと、パンツ系⁷⁾の農牧民とは異なるサン独自の家畜飼育や農耕の伝統がみうけられる(池谷, 2002)。すべてのサンが農耕に従事しているわけではないが、一部のサンはスイカ、ササゲ、トウモロコシなどを栽培していた。また、家畜飼育では、ヤギがもっとも広く飼われていたが、ニワトリやウシなどを飼育する人もいる。

まず、彼らの農耕の方法をみてみると、最初に畑の範囲を決めてから耕起するのではなく、降雨の状況に応じて畑の広さを変えている(池谷, 2002)。それに応じて、畑の囲いも拡大したり縮小したりする。さらに、降雨が豊富で収穫量が大きい場合には、収穫物は耕作していない人にも分配される。その実態をカデの事例のなかから紹介する。

1993 年の場合、グウィの畑では、約 1000 個のスイカが結実した。しかし、4 月に収穫が始まると、訪問者が絶えない。彼らは、畑の主とは親族や姻族で結ばれている人びとである。その後、血縁関係がない人びとにも、

残されたスイカは分配され続けた⁷⁾。その一方で、同年のガナの畑においては、畑をつくっていない 6 世帯のサンが畑の近くに移動して家をつくり住み始めた(図 3)。それから約 3 ヶ月間は、彼らにも畑のスイカが分配され続けた。その後、すべてのスイカを食べつくした後は、畑の近くのキャンプは 4 世帯のみが 2 つに分裂して、別の所へ移動した。2 世帯は居残り続けた。このような畑へのサンのキャンプの移動は、カデ以外の地域でもみられた現象である。ただ、メツァマノーでは、サンが収穫期のカラハリ族の畑の見張り番をした見返りにスイカが与えられるというような労働関係になっていて、サンとサンのあいだで見返りなくスイカを与えるという関係とは大きく異なっている点には注意してよいであろう。

このように、栽培スイカをめぐる分配システムがサン社会に強く働いているので、農業に才覚があると思われるサンであっても、収穫物を周囲に分配するので富裕にはなれないことがわかる。上述の野生スイカと同様に栽培スイカにおいても、「持っ者」から「持たざる者」への分配システムが作用して、収穫物の平均化が進むのである。

3.2. ヤギ飼養をめぐる委託関係と分配

サンが、いつからヤギ飼養を始めたのかは定かではない。一部のサンは、パンツ系の農牧民カラハリ族が所有するヤギの飼養の仕事をしていた見返りとして、あるいは毛皮との交換によって自らのヤギを所有した。現在のサンは、紅茶に利用するミルクの入手、時には食肉用、さらには馬を購入する際の交換に使われるように物の交換や売買に利用するためにヤギを飼養する。

ヤギは、交易によって他の集団から入手されるものである。例えば、1989 年のモラボにおいてヤギは移動するキャンプにおいて共同に飼養されている(池谷, 2002)。集落の家屋の中央部にヤギ囲いをおく場合があり、朝と夕方のみ、彼らは囲いの入り口をあけて閉じる程度で、放牧には付随しない。たまに行方不明のヤギがあると、それらを探しに行くことはある。しかも、時々、ヤギの所有者が、自分のヤギを食べたくなったという理由でヤギを殺すことがある。そのヤギは、近隣のキャンプの個人によって解体され、解体後は、当然のことのように、キャンプ内はもちろん近隣のキャンプにもヤギ肉が分配される。これらを観察していると、彼らは囲いのなかのヤギをいつでも利用したいときには使える貯蔵した肉のような意識をもっているように思える⁸⁾。同様に、ヤギのミルクもまた分配に使われる。なお、生きて飼養されているヤギが簡単に分配されるようなことはない。

その一方で、カデでもモラボでも世帯別のヤギの所有

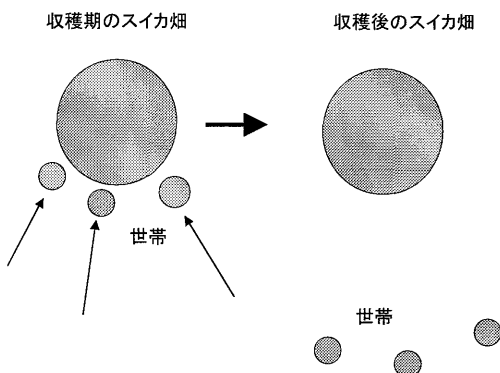


図3. スイカ畑の近くへのキャンプ移動

頭数には、サンのなかで違いが認められる (Sugawara, 1991, 池谷, 2002)。これらは、所有関係が明確にされた財として、所有される財産としての意味は認められる。しかも、ヤギ囲いに飼われているヤギの所有者が、そのキャンプに居住する者とは限らない点も重要である。キャンプ以外に住むサンがヤギの世話をゆだねている場合も往々にしてある。ヤギを所有しない者にとっては、ヤギの世話の見返りとして、ヤギの乳を自由に利用したり子ヤギの獲得などの恩恵も得ることができる。これは、上述した栽培スイカのように、「持つ者」から「持たざる者」への分配システムが作用して、収益の分散化が進むことと類似している一方で、このような委託関係によってますますヤギの所有頭数の世帯間格差が大きくなるという両面をあわせもっているのである⁹⁾。

しかし、ウシのような大型家畜がサン社会に導入された場合には、まったく様相が異なってくる。サンのなかにはウシを所有するものはほとんどいないが¹⁰⁾、ウシの場合には放牧のためにさまざまな労力がかかり、食べる草の量も多いので、放牧と狩猟採集が両立できるものか疑問が残される。ウシの所有頭数は、貧富の差に対応することが予想される。このように、ウシの用途が多目的になり個人による所有が明確になると、その社会は平等主義社会ではなくなるように筆者は考えているが、サンと農牧社会との間には大きな断層があり、さまざまな段階を想定しなければならないであろう。

4. まとめと考察

本稿では、南部アフリカに広く暮らしてきたサンのなかでの分配の多様性を把握すると同時に、ボツワナ中部のガナに焦点を当て、彼らの狩猟、採集、農耕、牧畜などの生業に対応する獲物や収穫物の所有者、分配の実践や貯蔵方法などを報告した。その結果は、表1にまとめられる。サン社会のなかの各々の生業ごとに獲物や収穫物の所有者は、あらかじめ緩やかなルールによって決められていること、狩猟採集のみならず農耕牧畜においても「持つ者」から「持たざる者」への分配システムが働いていることがわかる。とりわけ農耕に関しては、収穫時期の畑近くに移動してきた血縁関係のないキャンプの成員にも収穫物が分配されることが注目に値する。つまり、栽培スイカを受け取る側は、ある一定期間のあいだに相手側に与えるものがあるのか否かが疑問であり、もしそれができないとすると、互酬的関係の認定が困難になるであろう。

サン社会における野生スイカの消費について分析する

と、その蓄積がきわめて困難であることがわかる。動物の干肉の場合にも、従来からみられた生肉の分配をなくすのではなくて、それを維持しながら、交易用と分配用の肉をうまく使い分けることで、商品経済の新たな動きに対応してきたのである。

4.1. 商品経済の浸透と分配の維持

これまでの狩猟採集民の研究では、分配は、獲物の量の個人差であるとか、数家族のなかでの互酬的分配によってリスクを軽減するというような経済的側面と結びつけて議論されてきた。しかし、狩猟のように能力などによって不平等でしか獲物を獲得できない活動を主たる生業としていれば、分配なしでは生活を維持していくことは難しい。このため、分配は社会的統合のために行なわれるともいえる。また、カラハリ狩猟採集民の事例では、肉の分配のあり方に関してフォーマルなものといフォーマルなものに2分類されたり (Kent, 1993: 492)、肉の分配のような「義理的な分配」と料理の供与のような「自発的な分け与え」とに二分され、食べ物の種類によって、2つの比重が変化するという視点が提示されている (今村, 1993, 1996)。

しかし、本稿で述べたように、サンの社会は商品経済化が浸透しており、定住生活をしいられている。これにともない、サンの生業も狩猟採集や農耕牧畜だけではなく民芸品生産や道路工事にも従事するようになった (池谷, 2002)。政府の配給によって、安定した食糧も得られるようになってきている。このため、狩猟採集で得られた物の位置づけがサン社会のなかで変わってきている点に注意する必要がある。つまり、分配の背景として経済的側面よりも社会的側面の占める割合が増えていると考えられる。

例えば、狩猟そのものの性格も変わりつつある。かつては生業としての狩猟であったものが、現在では商業的狩猟としての様相を呈している。すでに述べたように、犬、騎馬、鬘という3つの狩猟法別に見ても、犬、馬、鬘の所有者に毛皮や肉がいったん独占的に占有された後に、それらは食用、贈与用、現金獲得用の3つに利用されている点では共通する。筆者は、彼らの猟法の形態の違いよりは、食用から現金獲得用に彼らの利用の中心が動いたこと、食用と贈与用の肉の分配行為のなかに、彼らの伝統的な価値規範が根強く生きていることに注目している (池谷, 1996)。

その一方で、サンは肉を販売することで現金を入手できるようになった。これで、理屈の上では狩猟で得た肉は貨幣に形を変えて、蓄積可能になったことになる。しかし、実際には貨幣として蓄積されることはあまりなく、

表1. サンの生業、資源の所有者、分配

		資源の所有者	分配	貯蔵	備考
(狩猟)	・弓矢猟による肉	矢の所有者	○	?	
	・犬猟による肉	犬の所有者	○	○	干肉の販売
	・騎馬猟による肉	馬の所有者	○	○	干肉の販売
	・罽猟による肉	罽の所有者	○	なし	毛皮の販売
(採集)	・モンゴンゴ	採集者	○	?	Lee(1979: 200)
	・野生スイカ	採集者	○	○	
(農耕)	・栽培スイカ	畑の開墾者	○	○	キャンプの移動
(牧畜)	・ヤギ	ヤギの入手者	○	○	
	・ウシ	ウシの入手者	?	○	

(出所) モンゴンゴの資料以外はすべて、筆者の観察および聞き取りによる。

酒場などで多人数で消費してしまうか、ヤギや馬などを購入するために使われることもある。このように、サンの社会では、商品経済化が進むにつれて一部ではヤギや馬などの家畜の形として富の蓄積がすすむこともあるが、大部分は生存維持と互酬性規範を中心とした慣習経済の力が強く作用しているために富の蓄積がすすまないのであるといえる。

以上のことから、分配のあり方も外部社会が与える変化に応じて変化してきた側面がある点を指摘したい。地域史のなかで分配のあり方の変化をみることは今後の課題となるであろう。

4.2. 食物分配と貯蔵

先述したように、彼らの社会では、採集物や動物の肉を獲得するのみならず、それらの貯蔵を行ってきた結果、「持てる者」と「持てない者」との不平等が存在する。これは、栽培スイカやヤギにおいても同様な傾向を見ることができる。

イギリスの社会人類学者ウッドバーンは、即席的報酬(immediate return)と遅延的報酬(delayed return)という相反する2つの原理に基づいて、狩猟採集社会を2つに分類した。前者では、食物の獲得とその消費のあいだには時間的な遅延はなく、アフリカの狩猟採集民サンやハツアなどを代表例として挙げている。後者としては、獲得した資源を長い間貯蔵することができる北方の狩猟採集民が挙げられている。また、永田はマレーシアの狩猟採集民オランアスリ社会のなかでの交易と分配との関係について論じている¹¹⁾。もし狩猟採集民が交易に従事するならば、獲物をその場で分配するという即席的報酬の原理だけで彼らの経済は完結していないことになる。にもかかわらず、交易に従事する狩猟採集民の社会では、返礼の期待をしない分け合い(sharing)の原理が作用している(永田, 2005)。さらに、アラスカのヌナミット(エスキモー)では、貯蔵される肉は分配されないが、貯蔵

されない肉は分配され(Binford, 1984)、貯蔵される肉もある種の危機的状況になる場合には分配される。

筆者は、かねてから即席的報酬にサンを含める議論に疑問を持っていた。先述したように、筆者が調査・研究をおこなってきたボツワナ中部のガナでは、およそ4ヵ月の雨季と9ヵ月の乾季とがあるが、地表水がまったくない乾季のあいだの水源として野生スイカが利用されている。人びとは、長い乾季のあいだ、雨季に採集したスイカを貯蔵庫におき、数ヵ月間にわたり利用しつづけていた。これは、まさに遅延的報酬を示している。つまり、サンの中にも、即席的報酬と遅延的報酬とがみられるということである。

近年の南部アフリカのサン社会は、遊動から定住へ移行してきた。それに伴い、分配の方法も変えてきている。サンのような平等主義社会における貯蔵と分配の問題を考える際に、貯蔵するものが野生スイカや肉の場合には、それがたとえ交易用に使われていようとも、平等主義による分配が機能するため、実際に社会が階層化に向かうまでに至っていない。つまり、「持てる者」と「持てない者」の不平等が存在するにもかかわらず、分配の平等原理がそれを目立たなくさせていることになる。

ただし、彼らの所有物がヤギの場合には類似の傾向が認めるものの、大型家畜のウシがサンの社会に導入されると、ヤギ以上に個人による所有が明確になり、分配の機能が働きづらくなっていくであろう。このため、将来的にウシの導入が進めば、サンの社会は階層化の方向に向かうのではないかと考えている。

4.3. 狩猟採集民と農耕民に共通する 生業としてのヤギ飼養

本稿では、冒頭で述べたように、互酬的関係をめぐってアフリカの狩猟採集民社会¹²⁾とアフリカの農耕民社会のあいだに連続性があるものなのか、非連続性を持つものであるのかという問題意識を持っていた。掛谷は生

態人類学の立場から (掛谷, 1991), 杉村はアフリカ農民経済論の立場から (杉村, 2004), 狩猟採集民との連続性が存在することを指摘する。これに対して, バーナードは, アフリカの非狩猟採集民もまた分配を行なうが, 狩猟採集民のそれは広範囲の規模で徹底的に行なわれる点で異なるという (Barnard, 2002)。

さて, アフリカ農民の行動様式では, 生産を必要以上に拡大せず, 生存維持的というレベルでとどめる農耕が展開し, 食生活をめぐるきわめて強い分与の経済が働いているという。同時に, アフリカ農民のなかで焼畑農民クムの場合には, 生活の中できわめて高い文化的価値がヤギに与えられていることが指摘されている (杉村, 2004)。農業の内部よりも, その外部の牧を通して「富」が蓄積されているという。

これに対して, 本稿で言及されたカラハリ狩猟採集社会においても, ヤギ飼養が重要であることを指摘した。彼らのヤギ飼養では, その飼養の委託関係を通して, 人と人との関係が再確認され, 人間関係の紐帯を強める役割を担っている。しかし, アフリカ中部の農民とは異なり, カラハリ砂漠では厳しい早魃のため, ヤギの生存維持はきわめて厳しい。この意味では, ヤギをめぐる委託関係は, 早魃などの危機 (リスク) に対する戦略として位置づけて考えることができるが, ヤギはカラハリ砂漠のなかでは安定した富にはなりえない。

同時に, 社会のなかでのヤギの役割について狩猟採集社会と農耕民ではどのような相違点がみられるのであろうか。焼畑民クムの場合には, ヤギは婚資や社会的な交渉の場面で使われ, 一種の原始貨幣としての役割があるが, 日常生活の中ではほとんど役に立っていないという (杉村, 2004)。カラハリ狩猟採集民の場合においても, ヤギが家畜やものの購入の際の貨幣代わりをしていて, ヤギの所有者がお金に困ったときなど, それを処分して生活の助けにしたりすることがある。このほかにも, 紅茶に利用するミルクを除いて日常生活で役にたっていない点では, 両者はよく類似している。しかし, 狩猟採集民の場合には, クムのように社会的富として婚資に使われるようなことはほとんどない。つまり, 2つの社会のあいだには生業複合という観点から生業としての連続性が認められるだけではなく, 所有物の消費システムのなかにも連続性を確認することができた。

本稿は, カラハリ狩猟採集民の生業とその分配にとくに注目することで, 市場化の側面を無視できなくなった段階におけるサンの経済行動の特質を把握することにつとめた。彼らの社会では, 狩猟採集のみならず農耕牧畜においても, 生存維持的志向を持ち, 「持つ者」が「持たない者」に分けるのは当たり前であるというモラル・

エコノミーが生きている。つまり, 狩猟採集民の社会は過去数十年のあいだに遊動や半定住から定住に大きな変化を経験しているが, そこでは一般互酬の関係は維持されてきたのである。

従来のサン研究をふりかえってみると, 英語圏ではクンモデルが, 日本ではグウィヤガナモデルがカラハリ狩猟採集民の代表として示されてきた。しかし, 南部アフリカのサン社会における分配の地域性を述べたように, 変わりゆく彼らの社会をみると, 彼らの文化的特質には地域性が存在するので, それらを一般化することは困難な状況にある。まして, アフリカの狩猟採集民の経済の特質をさらに一般化することがますます難しくなっている。本稿では, 変わりゆくカラハリ狩猟採集民を例としながら, 彼らの生存維持的志向を持つ経済行動の特質を, ある程度は把握できたものと考えている。

注

- 1) 狩猟採集民社会における一般互酬性とは, 当事者間の間に, 長い時間の経過とともにお互いの間の平衡が保たれるという信念が存在するもので, その期待にもとづいて交換が行なわれることを示す (田中, 1971)。
- 2) 分配は, 食物, 採集狩猟具, 世帯道具, 衣類, 装身具など様々な品物について行なわれるが, なかでも食物の分配がもっとも頻繁に明瞭にあらわれ, 最も重要なものである (田中, 1971: 95)。また, 分配は, 物の移動という「シェアリング」の物質的な次元の出来事のみを意味する (今村, 1996: 53)。
- 3) ガナは, 他のサンの集団に比べて違いが認められている。狩猟採集に加えて, 環境変動への対応のために, ある程度の食糧生産に従事している (Cashdan, 1980: 117)。ガナはまた, 外の社会とのあいだで毛皮を販売することで富を貯えてきた。
- 4) 騎馬猟では, 馬の所有者の発言力が増した結果, 大量の肉が集積されるという (大崎, 1991)。しかし, 筆者の調査によると, 馬の所有者が獲物の所有者であるという不文律がサンのなかにあると考えている。
- 5) 「マイパー」は, 居住権は認められていないが, 村から数 km 離れて各世帯が親族などとともに暮らすしかた。
- 6) 2006 年 12 月現在, カデとモラボはともに廃村になっている。その経緯については, 池谷 (2006) を参照されたい。
- 7) 1988 年のクーツェにおいても, 世帯間およびキャンプ間において栽培スイカの分配は行なわれている (Kent, 1993: 495)。しかし, 1987 年, 1989 - 91 年には, 降雨量が少なく分配するだけのスイカが生育していない。
- 8) ヤギは, 貯蔵された肉の一種としてみなされ, 野生動物が不足する年には重要な食糧となる (Cashdan, 1980: 118)。また, 親類や友人がヤギのときつを行なう場合が典型的にみられる (Kent, 1993: 495)。

- 9) ヤギの所有頭数の世帯間格差は、様々な理由によってヤギの購入や販売が頻繁に起きることによって生じていると考えられる。
- 10) 1930 年ごろに、調査地においてカラハリ族によってウシが飼育されていた（池谷，1999）。1976-77 年のガナのなかには、少数のウシを所有するものがいた（Cashdan, 1980: 117）。1997 年以降にニューカデに移住した多くのサンは、移住の補償のひとつとして政府により与えられたウシを所有している。
- 11) これらの社会の一つマレーシアの狩猟採集民では、干した猿の肉を除いて、食糧貯蔵の技術はないという（永田，2005）。
- 12) アフリカの狩猟採集民のなかではクンとタンザニアのハツツアによる分配の比較がみられる（Woodburn, 1998）。肉の分配については、両者でよく似ている。しかし、クンはトランスダンスのなかでもヒーラーが患者に力を分け与えるというように分配するという考え方を強調する。また、クンのハローは、バンド間の経済的互酬的関係を示し、交易の形で交換されるが、ハツツアでは、このような形はみられない。

参考文献

- 池谷和信 (1989) 「カラハリ中部・サンの狩猟活動—犬獺を中心にして」『季刊人類学』20(4): 284-329.
- 池谷和信 (1996) 「生業狩猟から商業狩猟へ—狩猟採集民ブッシュマンの文化変容」田中二郎他編『続自然社会の人類学』アカデミア出版会, pp. 21-49.
- 池谷和信 (1999) 「狩猟民と毛皮交易—世界経済システムの周辺からの視点」『民族学研究』64(2): 199-222.
- 池谷和信 (2002) 『国家のなかでの狩猟採集民—カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』国立民族学博物館研究叢書 4 千里文化財団.
- 池谷和信 (2006) 「ボツワナの自然保護区とカラハリ先住民をめぐる政治生態学」『アフリカ研究』69: 101-112.
- 池谷和信 (2007) 「平等主義社会における貯蔵と分配—アフリカ狩猟採集民の事例」『季刊考古学』97: 63-66.
- 今村薫 (1993) 「サンの協同と分配—女性の生業活動の視点から」『アフリカ研究』42: 1-25.
- 今村薫 (1996) 「ささやかな饗宴—狩猟民ブッシュマンの食物分配」田中二郎他編『続自然社会の人類学』アカデミア出版会, 51-80.
- 今村薫 (2006) 「シェアリング・システムの全体像—カラハリ狩猟採集民の事例から」『アフリカ研究』69: 101-120.
- 大崎雅一 (1991) 「カラハリ狩猟採集民サンの定住化とその影響」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社, pp. 568-593.
- 掛谷誠 (1991) 「平等性と不平等性とはさま」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社, pp. 59-88.
- 菅原和孝 (1993) 『身体的人类学—カラハリ狩猟採集民グウィの日常行動』河出書房新社.
- 菅原和孝 (2004) 「セントラル・カラハリ・ブッシュマン小史」田中二郎ほか編『遊動民』昭和堂, pp. 3-25.
- 杉村和彦 (2004) 『アフリカ農民の経済—組織原理の地域比較』世界思想社.
- 田中二郎 (1971) 『ブッシュマン—生態人類学的研究』思索社.
- 永田脩一 (2005) 「交易と分配」池谷和信編『熱帯アジアの森の民』人文書院, pp. 97-120.
- 丸山淳子 (2004) 「命をさがす人びと—再定住地の内と外の暮らし」田中二郎ほか編『遊動民』昭和堂, pp. 249-267.
- Barnard, A. (2002) "The Foraging Mode of Thought", *Senri Ethnological Studies*, 60: 5-24.
- Binford, L. (1984) "Butchering, Sharing, and the Archaeological Record", *Journal of Anthropological Archaeology* 3: 235-257.
- Cashdan, E. (1980) "Egalitarianism among Hunters and Gatherers", *American Anthropologist* 82: 116-120.
- Cashdan, E. (1985) "Coping with Risk: Reciprocity among the Basarwa of Northern Botswana", *Man* 20: 454-474.
- Ikeya, K. (1996) "Dry Farming among the San in the Central Kalahari", *African Study Monographs Suppl.* 22: 85-100.
- Ingold, T. (1988) "Notes on the Foraging Mode of Production", Ingold, T., D. Riches and J. Woodburn eds. *Hunters and Gatherers: History, Evolution and Social Change*. Berg.
- Kent, S. (1993) "Sharing in an Egalitarian Kalahari Community", *Man* 28: 479-514.
- Kent, S. ed. (2002) *Cultural Diversity in African Foragers*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Lee, R. (1979) *!Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Marshall, L. (1961) "Sharing, Talking, and Giving: Relief of Social Tensions", *Africa* 31: 231-249.
- Mitchell, P. (2002) *The Archaeology of the Southern Africa*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Osaki, M. (1984) "The Social Influence of Change in Hunting Technique among the Central Kalahari San", *African Study Monographs* 5: 49-62.
- Silberbauer, G. B. (1981) *Hunter and Habitat in the Central Kalahari Desert*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Sugawara, K. (1991) "The Economics of Social Life among the Central Kalahari San", *Senri Ethnological Studies* 30: 91-116.
- Tanaka, J. (1991) "Egalitarianism and the Cash Economy among the Central Kalahari San", *Senri Ethnological Studies* 30: 117-134.
- Wiessener, P. (1982) "Risk, Reciprocity and Social Influences on !Kung San Economics", in Leacock E. and R. Lee (eds.), *Politics and History in Band Societies*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 61-84.
- Woodburn, J. (1982) "Egalitarian Societies", *Man* 17(3): 431-451.
- Woodburn, J. (1998) "'Sharing Is Not a Form of Exchange': An Analysis of Property-Sharing in Immediate-Return Hunter-Gatherer Societies", Hann C. M. ed. *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 48-63.

(Summary)**Subsistence and Sharing Among the Kalahari Hunter-Gatherers****Kazunobu IKEYA***National Museum of Ethnology*

The San peoples who have lived in the Kalahari desert of the southern Africa, are known as a typical example of the egalitarian society. They have the distribution system of food like animal meat caught by hunting or edible plants in the camp or settlement. It is said that it is very difficult for them to accumulate the private property because the distribution system.

This paper aims to clarify the characteristic of their economic behaviors which have the both aspects of subsistence and commercial from the perspective of moral economy as the strategies for the risk. The regional diversity of sharing among the San and the practice of sharing and the method of food storage in the particular settlement are described. Results have revealed the following points.

The owners of caught animals and harvest have been fixed by the rule roughly according to the kind of subsistence like hunting and gathering etc. among the San. They have the system of distribution from "those who have" to "those who do not" in not only caught meat and gathered food, but also cultivation crops. Especially in the farming the crops were distributed to some other group who migrated to the cultivated fields during the harvest time. They also distinguish the meat for subsistence and commercial ones, and the meat for subsistence are distributed equally among the camp members. Lastly, goat raisings has a important role of their society and some farmer's community commonly in the tropical Africa.